転生紳士の紳士（パンツ）な日々

ナシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生紳士の紳士ハンツな日々

【Nコード】

N2364Q

【作者名】

ナシ

【あらすじ】

ある日ガンバ イドのカードを買いに行っていた途中、気がついたら命を落としていた青年、篤志。

そのときに出会ったライアという女神によって、篤志は限りなく自分のいた世界と似ているが違う世界へと生まれ変わることになった。リリカルなのはという世界を知る女神と、その世界を全く知らない篤志、その二人が選ぶ未来とは？

第1話「死んじまった俺、乙……いや、乙じゃねえって！！！！衝撃のダメ神との

これは駄作家ことナシがオリ主、転生、憑依(?)といったネタを書いたらどうなるかといった感じの内容です。

以下注意点です。

- 1：主人公がかなりふざけた感じですが。一言でいえばなのは至上主義者。
- 2：戦闘時とはあるキャラの無双があるかもしれません。
- 3：Arcadiaに投稿した同一の作品の本編を一人称ではなく三人称で書いた改訂版となっています。
- 4：かなり勢いで書いています。また、書かれていないことに関しては基本的に原作準拠となっていますので、リリカルなのは原作を見たことがない方にはワケの分からない部分が出てくるかもしれません。
- 5：仮面ライダーの台詞をパクったようなものと仮面ライダーWのガイアメモリを参考にした主人公の装備が出てきます。

以上が大まかな注意点です。

第1話「死んじまった俺、乙……いや、乙じゃねえって！！！！衝撃のダメ神との出会い」

第1話「死んじまった俺、乙……いや、乙じゃねえって！！！！衝撃のダメ神との出会い」

「あのお……起きてください」

誰かが肩を叩きながら青年に向かって声をかけてくる。

青年にとって、その声の聞き覚えはない。……いや、少しだけ聞いたこともあるような感じもする。

しかし、それを思い出すことはできなかった。

「あのお……大切なお話があるんです」

声をかけてくる女性は大切な話があるという。

しかし、青年にとってそれよりも重要なのは、青年の姉の命令によってゲームセンターに行つて目的のモノを入手することのほうが大切だった。

「は、早くゲーセンに行つてモモタ スのレジェンドレアを当てないと……殺される」

女性の声に答えること無く、青年は何かを恐れるようにうわ言を繰り返す。

青年はその日に新しい弾が稼動したカードゲームのレアなカードを当てて来いという半ば鬼とも言つような命令によって姉に外へと放り出された。

数年前に両親が他界し、その後女手ひとつで育ててくれたこともあり、青年は姉の命令を理不尽とは思いつつ、それに面と向かつて反

抗することもできずに現在に至る。

そのため、姉にとって体のよいパシリみたいなものになりつつあった。

「えっと、そろそろ本当に起きて欲しいんですけど……どうしまし
よう?」

「うつせえよ!!!」

今にも泣きそうな声を出す女性など知ったことじゃないとも言っ
ように、青年は体をムクリと起こして怒鳴りだした。

「うう〜、そう言われてもこっちだって重要なんですよ〜」

涙目のような感じの声が聞こえた方向を青年が見てみると、そこ
は一人の人間の女性……らしきもの真っ暗な空間の中にいた。

整った顔立ちに蒼い瞳、ストレートに伸ばした金色の髪、服という
よりは衣と言った方がいい真っ白くて生地薄い衣服、手に持た槍
なのか杖なのか剣なのかわからないとりあえず長い得物、背は青年
より低く、出るところは出ていて引っ込むところは引っ込んでいる
という理想的なスタイル。

白い衣の奥には薄手のためか、肌色しか見えない。下着を履いてい
ないのだろうか?

でも、一番目立っている背中に広がる6枚の白い翼……明らかに人
間ではないだろう。

その翼は明らかに飾りではなく、女性のちょっとした挙動でかすか
ではあるが動いていた体。

その翼以外の部分を見れば、青年にとってもっとも好みのタイプの
女性だった。

そして、背中に生えている翼を見て青年が連想したのは……

「……天使？」

「はい、その通りです。よくわかりになりましたね。あ、でもどちらかという女神と言った方がいいかもしれません」

自分を女神と言った女性は、手をポンと叩いて喜ぶ。

しかし、それがどういう意味なのか青年にはよく理解出来ていない。

いや、何となく意味というか結論はわかってはいるつもりだが……理解したくなかった。

「えっと、大変申し訳ないんですが……あなたは死んでしまいました」

「……死んだ？それって俺がか？」

突然告げられる驚愕な真実。

カードを買いに出かけただけで、気づいたら死んでいるなどと言われれば誰だって嘘だと思っだろう。

しかし、青年の言葉に女神と名乗った女性は申し訳なさそうに頷いた。

死んだ……つまり青年は姉による理不尽なお使いを遂行することができない……ではなく、青年の人生がここで終わりということを示しているということだった。

「ちょ、ちょっと待てよ!!!俺は普通に外に出ただけだぞ？なんでそれで死ぬんだよ!!!それに、そもそもお前は誰なんだよ!!!」

青年の歩いていた場所は車の通りも少なく、青年自身は体のどこかが悪いなんてことはない。

少なくともいきなり死ぬなんてことは無いはずだった。

そんなことをまくし立てた青年に、すまなそうな視線を投げかけてくる女神と名乗った女性は怖ず怖ずと口を開いてきた。

「ほんと〜に覚えていませんか？」

それはまるで何かを確認するような口調で、なおかつ何かを期待しているような口調も含まれていたが、青年がそれに気付くことはなかった。

「……俺に問題でもあったのか？」

「いえ、そういうわけじゃないんですけど……ほんと〜に覚えてないんですか？」

「そういえば……ゲーセンに行く途中で何か光っていたような？」

青年はゲームセンターに向かう途中で空を見上げると、二つくらいの光が空でぶつかってたような光景を思い出す。

しかし、それがなんのことを意味するのかまではわからなかった。女神と名乗った女性はそれを聞いてすまなそうな表情をして……

「えっと、その一つが私です」

自らの罪を告白した。

「……は？」

「実は……」

ここから先の説明は長いので簡単にまとめてみる。

なぜなら、何故か説明に入るとこの女性の言動が拳動不審で、青年自身も意味を理解するのに時間がかかったからだ。

まず最初に、この自分を女神と名乗った女性の名前はライア。いま

いち説明が不明瞭なため訳がわからないが、とある人物を追っかけてきたらしい。

そして、ターゲットを見つけ、戦闘に入ったのはよかったが、その時に偶然通り掛かった人間、すなわちこの青年を巻き込んでしまった……らしい。

つまり、今の青年がこうなったのは責任の全てというか半分は……

「お前のせいかあああああ!!!」

そういうことになる。

責任のもう半分はそのターゲットとかいう存在である。

「ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい!!!」

とりあえず死んだ理由がわかり、犯人であるライアに掴みかかった青年は悪くないとも言える。

掴みかかった拍子に薄い衣がはだけて豊かな胸の先端についていた桃色の突起とかがチラツと見えたのも青年のせいではない。

青年にとってはやったことは別としても好みのタイプの女性のそんな姿を見ることができたのは役得だったが……。

とりあえずそれは青年の脳内に記録されることになった。

互いに言いたいことを言い終えたのか、青年とライアは肩で息をしながらお互いの息が落ち着くのを待った。

「それですね、流石にこれでは申し訳ないと思ひまして、あなたを別の世界に転生させようと思うのですが……」

「それなら今すぐ生き返らせてくれ」

青年がそう言った瞬間ライアが固まった。

いや、自由に転生とかできるんなら生き返らせることもできるんじ

やないのか？と青年が思うのも無理ではないだろう。

「それはできないんですよお、一度死んだ魂が同じ世界に戻るには輪廻の輪をくぐって転生しないとイケません。それをした場合は前世の記憶も無くなっちゃいます。それに少し時間がかかるんですよ。」

「少しってどのくらい？」

青年にとっては一年やそこらなら記憶が残るようにしてもらって転生させてもらうのも悪くないかもしれない。

それくらいなら待つのも悪く無いとも思っている。

唯一気があるがとすれば、それは残された姉だろう。

しかし、既に死んでしまった以上はどうにもできない。

これで自分の元居た場所に帰れるならそれを選んでいただろうが、それができないとなれば対して悩む必要もないだろう。

「そうですねえ、ざっと…… たったの500年くらいですね」

たったの500年と青年が思わず見惚れるような笑顔でライアが言い切った。

（こ、この墮天使だかダメ神は！！ふざけてんのか？）

その言葉を聞いて一瞬だが青年の心に、このダメ神をぶっ飛ばすべきかどうかという葛藤が生まれた。

しかし、流石に好みのタイプの女性をぶっ飛ばすのに抵抗があり……

「長すぎじゃー！！！」

青年はダメ神の頭を叩く程度に留めたのは悪くない……はずだ。

「いったく、短いじゃないですか。私の生きてきた時間のホンの10分の1にも満たない時間ですよ?」

「俺は人間なんだよ!!! 人生長くて100年くらいしか生きられないんだよ!!!」

しかも今まで20数年しか生きてこなかった以上、500年という時間は長すぎる。

「でも、他の世界に転生するにしても問題はあるんですよ?」

ライアは困ったような顔をしながら説明を開始する。

「他の世界に転生する場合はすぐに転生できますけど、もちろん記憶はなくなります」

輪廻の輪を通って転生する場合、前世の記憶は無くなる。

それは言われることもなくわかるようなことだった。

「それに私は別の世界に逃げた相手を追わないといけませんし……。ですので、私はその世界に向かいます。ですから、早く決めて欲しいんですが……」

(決めるって、今まで生きていた世界に500年待つて転生するか、他の世界に今すぐ転生するかだよな?どっちでもかまわないっていうえばかまわないんだよな。どうせ記憶を失っちまうんだし……)

そんな風に青年が悩んでいると、ライアが下から何かに縋るような視線で見上げてきた。

「一つだけ……記憶を失わないやり方が無いわけじゃないんですけど

ど……」
「ホントか？」

あまりの意外な言葉に青年はライアに掴みかかる。
記憶が無くなる……それは青年の魂が輪廻の輪を通って生まれ変わるだけで青年にとっては人生の終わりを意味する。
それは死んだことと同然とも言えるだろう。

「どうやって？なあ、どうやって？」

そんなこともあり、青年はライアの肩を掴み揺さぶって、自分がこれからも生きることの唯一の望みを託すことしかできなかった。
そして、揺さぶられたライアは目を回したのかグルグルといった表現が似合うかのような目をしている。

「はら〜……あ、えっとですね、私の行く世界にあなたも一緒に転生するんです。その際に転生する体に私を使えば神の御加護で記憶を失うことも無くなるはずです」

「よし、それでいこう！！」

ライアの行く世界に転生するだけでいいのなら、そこまで気にするようなことでもないと判断した青年は、その提案に対して考えることもなく承諾した。

「……いいんですか？」

「ああ、そつちなら記憶は無くならないんだろう？」

記憶があるのなら、それは青年の人生が続いていくと言ってもいい。
そんなこともあり、青年の心にそこまでの悩みはなかった。

「わかりました。お名前は今までの名前の篤志でいいですね」
「ああ……って、なんで知ってるんだ？」

青年は自分の名前なんて一度も言っていない。

「わ、私は女神ですからそれくらいのはあ、朝飯前です」

それを指摘されたライアは、今まで以上に慌てた様子を見せたが青年……篤志にその理由はわからなかった。

「いいからさっさとやっちゃいますよ！！！」

青年に向けて両手を突き出したライアの手のひらから光を発し始めたのを見ながら、篤志は今度の人生では姉にパシられなきゃいいなあなんてアホなことを考えていた。

「こんなことに巻き込んで……ごめんなさい」

そんなことを考えていたため、ライアの呟きを聞き取ることはできなかった。

あれから8年、篤志は無事に生まれ変わった世界を生きている。
生まれたときは赤ん坊だったせいかわ、記憶は曖昧でよく憶えていなかったが、一歳ころから少しずつ昔……前世のことも思い出してき

た。

まあ、篤志にとって一番ショックだったのは母親にオムツを変えられるときだった。

一応物心ついているから羞恥心というモノはある。

だからこそオムツを変えられるあの瞬間は辛い。

一緒に生まれた双子の姉は漏らしたときに泣いていたが、篤志はオムツを変えられるときに一番抵抗していた。

まあ、この世界での篤志の母さんが普通のオバちゃんみたいな感じだったら、そこまで気にしなかっただろう。

しかし、篤志の母親は実の子である篤志が鼻屑目に見ても若くて美人だった。

想像してほしい。羞恥心を持っているのに、見目麗しい女性にオムツを変えられるという絶望感を。

そんな状況の中、よろこんでオムツを変えてくれと言う人間はそうはいないだろう。

今の青年の名前は高町篤志。

つい先程進級したばかりの、私立聖祥大付属小学校3年A組の生徒だ。

これまでの彼の人生は……いや、転生してからの8年間は一応平穩無事に過ごせたと言っていいだろう。

父親が事故にあって入院したなど色々あったが、それ以外は至って平凡な生活を送れたはずである。

彼の父親の高町士郎と高町桃子は、海鳴商店街にある喫茶店『喫茶翠屋』を営んでいる。

彼の『篤志』という名前も父親である士郎の一字をもらった……と
いうことになっている。

しかし、士と志は明らかに字が違う。これも生まれ変わる際にライアが関わった影響が出ているのかもしれない。

また、兄である恭也と姉である美由希は、父である土郎から御神流という剣術をやっているが、彼自身はそれをやっていない。

剣術そのものは別の人……人なのかはわからないが、一応師匠というか相棒のような存在に彼は教わっていた。

もつとも、篤志自身は今のところは平穩無事に生きられたらそれでいいと思っている。

剣術なんて体を鍛えるくらいにできればいいとしか考えていない。確かに力があれば何かを守るかもしれないと思っている。

しかし、彼ともう一人の片割れとも言える双子の姉が本当に小さかったときに、その力は彼らを守ってはくれなかった。

彼らの父が事故にあったときに母さんは店の経営で忙しく、兄はその手伝い、姉は父の身の回りの世話で家にいないことが多かった。

必然的に家には彼ともう一人の片割れだけが残されることになる。幸い、食事などは前もって用意してくれていたから飢えることはなかったが、彼から見てそれはこの際は大きな問題ではなかった。

少なくとも転生しても前世の記憶がある、つまりは家庭の事情をある程度の理解できる彼はともかく、もう一人の片割れはそんなことを理解できる状態ではないはずだから、母さん達がいなくて本当に寂しかったはずである。

そのせいも、家にいるときはよく片割れが彼にひつついてくることが多かった。

だから彼はもう一人の片割れだけでも幸せになつてくれたらとは思ふ。

別に父や母、兄や姉が嫌いなわけではない。ただ、優先順位で言えば父や母達よりももう一人の片割れの優先順位が上なだけだった。

(篤志さん、そろそろあの子を起こしにいかないか)

(……そうだな)

心の中に彼と8年間の苦楽を共にした……いや、苦はそこまで多くはなかった、とりあえず8年間を共に過ごしたライアの声が彼の心の中に響く。

どうやら生まれ変わったときにライアの体を使って転生したため、ライアの意識も篤志の中にある。

いや、篤志の意識がライアの体の中に入っていると聞いていいのかもしれない。

なぜなら、体もそうだが顔立ちもどことなく出会ったときのライアに似ているような女顔とでも言えればいい。

違う点といえば、やや目つきの悪い点が目立っている。

ちなみに、転生前は金色だった髪と蒼い瞳は転生した際に黒髪に黒い瞳になった。

日本人の両親の間に生まれたのに、これで金髪だったりしたら隔世遺伝だなんだで問題が出てきたかもしれない。

髪の長さはライアに涙目での懇願……髪は女の生命と言われて長く伸ばすことになってしまった。

もっとも、後ろで束ねる分にはそこまで邪魔にはならないからそこまで気にはならない

しかし、可愛いリボンをつけると言われた時に、篤志がハサミを持ってこの髪を切ると提案したらライアはリボンをつけることに関しては諦めてくれた。

もっとも、髪型に関してだけは譲るつもりはなかったようだが……。

そして、篤志の顔のことだが、ライアに似すぎているせいか双子の片割れとはあまりというか全く似ていない。

それで一時期血の繋がりがなかったか問題が出ていたが、戸籍上は紛れもない双子となっていたことで解決した。

次に体の主導権だが、ライアの姿によく似ているはずなのに主導権

はなぜか篤志にある。

篤志が生まれ変わる前にしつかりと話を聞いていなかったせいだが、ライアの体を使つての転生ということになったため、ライアの姿に篤志の意識が入っているわけだ。

しかし、流石に性別が男ということもあり、目付きの悪い女顔の男の子というのが篤志を見た第一印象と言える。

そして、先ほど述べた篤志の剣術の師匠が実はライアだった。

その修行方法というのは、ライアが剣を振っているイメージを篤志の心の中に投影して、それを実際に木の棒を持って延々と続けるだけ。

訓練内容はそれだけだから、御神流を習っている兄と姉には全く敵わない。

ライアにこんなことを続ける理由を聞いても『いつか必要になる』と言うだけで、何も説明はない。

そのときに『少なくとも後10年は……』とか言っていたようだが、篤志には聞こえなかったようだ。

そんなわけで、あまり多くを語らないライアに不満を持ったのか、しばしば篤志は……

(……いつか犯したるか？よし、そうしよう)

このようなことを誓うのだが、ライアはそのときには決まってること返す。

(どうやってですか?)

そう、ライアの言うように篤志とライアは同じ体に二つの精神が存在する、いわゆる二心同体みたいなものであり、篤志はライアに何にもできないと言ってよい。

この体になにかしても被害を被るのは体の主導権を握っている篤志

であり、ライアにはほとんど肉体的な被害がない。
まあ、ある一定の条件があればライアに被害は出るのだが、その時は篤志はこの体に対して何も出来ないのも意味が無い。
もっとも……

(でも俺は諦めない。いつの日か俺がライアに　　して×××して
するまでずっとえに諦めない)

(……はあ、どうしてこの人なんでしょうねえ)

元から好みの女性だったのか、無駄に意欲だけは満々な篤志にライアはため息をつくしか無かった。

しかし、篤志はときどき思うことがある。

見覚えがあるのだ、目付きを除いた自分のこの顔に。

ライアのことかとも思ったが、どうも違う。

この明らかに子どもの姿をどこかで見た記憶があるのだ。

しかし、それを思い出すことができない。

篤志はそのことは気のせいだと思い直し、双子の片割れを起こすために部屋を出て行った。

篤志の部屋のすぐ隣には、篤志の双子の片割れが今もなお情眼を貪っている。

ムダとは知りながらも篤志はドアをノックする。

なぜ無駄なのか？それは未だかつて朝に起こしに行って返事が帰ってきたことがないからだ。

ノックからしばらく経つが部屋の中から返事はない……死んでいる

もとい、いつものように眠っているようだ。
携帯のアラームをかけているとはいえ、それだと少し遅くなる。
仕方なく篤志は閉じられているドアを開いて中に突入した。
そして目の前にいる巨大なみの虫……いや、一応篤志の双子の姉で
ある高町なのは。
なぜか篤志と同じクラスでもある。

「みのむ……じゃなかった、起きろなのは」

篤志は思わず目の前の物体をそのままみの虫と言いつづになった。
姉さんとは言わない。戸籍上はなのはが姉だが、精神年齢的には篤
志のほうが上……ではある。
しかし、なのはは他の同年代の子どもと比べて、実際の年齢よりも
大人びた感じがするときがある。
それでも篤志といるときは年相応な行動を見せることもある。
篤志が声をかけてからしばらくして……

「ん……あっちゃん、なのははあっちゃんのお姉ちゃん
なんだよあ」

寝ぼけながら自分が姉であると主張する一応篤志の姉である高町な
のは。

だが、篤志がなのはを姉と呼ぶことはないだろう。
呼ぶ本人にそのつもりがないのだから……。

「く」

自分の主張が終わったのか、再び布団の中に潜り込み寝息をたてる
みの虫……らしき者を現世へと引き戻すべく、篤志はいつもの手を
使う。

「いいから……起きろ!!!」

いつもの手……それはおはよのキスでもなく、枕を取る簡単なイタズラなわけでもなく、かけ布団を引つ剥がすでもなく、なのはの寝ているベッドに敷かれているマットレスを思いつき引つ張るといふ、篤志命名『モーニングフオール』だった。

柵がなくて摩擦の少ない台のおかげか、8歳児の篤志の腕力でも引つ張ることのできたマットレスは、なのはを載せたままベッドから床へとずり落ちる。

そして、少しの間が開いて聞こえてくるドシンという轟音……いや、なのはの名誉のためにドンという音程度にしておいたほうがいいだろう。

そんな音が聞こえてくる。

(……何故だろう?これをやらないと朝が来たって感じがしない)
(今日も……いい朝ですね)

もはや生きがいの一部となった朝の一時であった。

「いったく、お尻打っちゃったあ」

なのはがお尻を押さえて立ち上がるのを見届けると、篤志はなのはの部屋から出ていこうとする。

「なのは、早く着替えて降りてこいよあ」

「なのはじゃなくてお姉ちゃんだってば、あっちゃんのバカ!!!」

なのはの投げた枕が篤志の閉じたドアより少しだけ外れるのも、篤志となのはの朝のお約束とも言える一幕だった。

そんなこんなで篤志達は朝食を食べ終えて、途中まで美由希と一緒にバス停まで向かう。

恭也はどうやら大学の講義が午後かららしくて、それまで家でのんびりしていくらしい。

バス停で美由希とも別れて、篤志はなのと一緒に学校に向かうバスに乗り込む。

しばらくバスが走ると、途中の停留所で二人の幼馴染とでもいうべき女の子が二人バスに乗り込んできた。

「アリサちゃん、すずかちゃん」

「なのは、篤志おはよう」

金髪幼女のアリサ・バニングスが勝気な笑みで挨拶してくる。

(やはり同じ金髪でもライアとは違うな。俺はライアあの巨乳の方が好みなんだよ。あれ？なんか話の内容が金髪から胸の話に変わってないか？ま、いつか。とりあえず貧乳のアリサはどうでもいい)

篤志に対するアリサの評価は以上である。

「なのはちゃん、あっくんおはよう」

(青いロングヘアの月村すずか。お淑やかで他人を立てる、まさに典型的な大和撫子とも言えはいいのか？少なくともアリサよりは性格的に付き合い易いだろう。俺から見ただけだな。もっとも、こ

「うちも貧乳だからどうでもいい」

同じく、篤志のすずかに対する評価もアリサとほとんど変化がない。

「おはようアリサ、すずか」

篤志は確かに二人を可愛いとは思いますが、それはただ単に可愛いと思うだけでそれ以上の感情はなかった。

(アリサやすずかに比べたら恭也兄さんの彼女の忍さんやすずかの家のメイドさんのノエルさんやファリンさんのほうが断然いい)

子どもには興味ないとでも言うように考え、心の中にいるライアに自分の主張を話す。

(まあ、兄さんから忍さんを取る気はないから、興味があるとしたらノエルさんやファリンさんだけだな。……ああ、そうだよメイドさんが好きだよ、大人の女の人が好きだよ。ノエルさんとファリンさんのガーターベルトに興味津々だよ、なんか文句あつか?)

(……開き直らないでくださいよお)

(ともかくお子様には興味はないんだよ)

ちなみに、なのはや篤志より誕生日の早いアリサが、篤志にお姉ちゃんと呼ぶように命令したことがある。

そのときの篤志の対応はスカートめくってから、ため息をついてもっと大人っぽいパンツ履いてから出直してきなという対応だった。そして、その報酬が往復ビンタだったことは言うまでもない。アリサ曰く……

(ジャーマンじゃないだけ感謝なさい)

とのこと。

ちなみになのはとすずかはそれを聞いて、なんだか物陰に行ったかと思うと、戻ったときには何か落ち込んでいた。

そんなこんなで今日も平凡な一日が始まっていく。

そう、篤志の愛すべき、平凡で普通な生活が今日も……

続いていく……はずだった。なのに、どこで何を間違ったのだろうか？

夕飯のときになのはが怪我をしたフェレットを見つけたという話をして、それを家でしばらく飼うことになったのはよかった。

しかし、夜中にいきなりなのは飛び出していくのを感じた篤志はすぐになのはを追いかけた。

その途中で篤志はなにか嫌な予感をしたので、急いでなのはを連れ戻そうとしたが、こんなときに限って運動音痴のはずなのはは異様に足が速かった。

いや、なのはが速いのではなくて、篤志がただ単になのはを見失っただけである。

そして、今もなのはを探している真っ最中だ。

(どこいったんでしょね、なのはちゃん)

「あのみのお虫め、こんなときは積極的に動きやがって、帰ったら泣

くまでウメボシしてやる」

(可哀想だからやめましょーよ)

ウメボシ……それは篤志の両こぶしでなのはのこめかみをグリグリとすることであり、なのはのお仕置きとして使用されることが多い。

(篤志さん、もしかしたら夕ごはんの時になのはちゃんが言っていたあの榎原動物病院に行ったのではないのでしょうか?)

「そういえば、フェレットは動物病院で預かってもらっているって言ってたな」

ライアの言葉で、今の状況ではそれが一番可能性があると感じた篤志は、ライアの助言通りに榎原動物病院へと足を急がせることになった。

そして、辿りついた篤志が見たものは……

学校の制服をアレンジしたようなコスプレをして杖を持ったなのはと、訳のわからない黒い化け物だった。

「……なんだよ、あれ?」

(なんていう禍々しい気……篤志さん、気をつけて)

篤志がこれは夢かと思っている中で、ライアは何か感じたのか警戒心を強めている。

もつとも、そんなのお構いなしに篤志はなのは元へと駆け出した。

「あっちゃん、何で来てるの？」

なのはも篤志のことに気がついたのか、驚きながら声をかけた。

「んなもん、いきなり家を飛び出すバカを追っかけたに決まってるだろ!!!」

「バカって言う方がバカなんだもん、あっちゃんのバカ!!!」

「それならなのはもバカだろう!!!」

「なのはじゃないもん、お姉ちゃんだもん!!!」

そして、お互いに今話すことじゃないことを一気にまくし立てる。

そのおかげで化け物が近づいてくるのに篤志もなのはも気が付かなかった。

(篤志さん、後ろです!!!)

篤志がライアの声に後ろを振り向くと、目の前に黒い影が迫っていた。

「なのは!!!」

化け物となのはの間にいる俺は、化け物を見ながらもなのはを突き飛ばした。

「あっちゃん!!!」

そして、無駄とは知りながらも化け物に向かってせめてもの抵抗となるように篤志は腕を突き出す。

ここで少しでも時間を稼げれば、なのは逃げる時間を作れるかもしれない。とか考えていたら格好がついたのかもしれないが、実際にはそんなの考えないで突き飛ばしていた。

（はあ、第二の人生もこれで終りなのか。思えば楽しい9年間だったな。……パシらずにすんだし、なのは逃げる時間くらい稼げただろ）

そんなことを考えながら最期の時を待つ。
しかし、何時まで経っても何にも起きない。

（なぶり殺そうとでも考えているのか？さすがにそれはイヤなんだけどな）

そう思いながらそおっつと目を開けてみると、篤志の手から化け物に向かって金色の光が化け物の攻撃を阻むように出ていた。

（篤志さん、このまま力を前に押し出すようにイメージして）
「お、おう……！」

篤志は突然のことに戸惑いながらも、ライアの言うとおりに化け物を押し出すようにイメージする。
徐々に押し出されていく化け物を見た篤志はさらに遠くに飛ばすようにイメージする。

（ダメです、それじゃあ強すぎます）

ライアの声に反応することもできずにより強い力をイメージすると、案の定化け物は大きく弾き飛ばされた。

(いけない!!!)

その結果、化け物は郊外にある病院から弾き飛ばされて住宅街のほうに吹き飛ばされた。

「やべっ」

ここでは特に問題起きなかったけど、あれが吹っ飛んでいった先でなにか起きないとは限らない。
それに……

(篤志さん、急いで追いかけますよ)

そう、このお節介なライアのせいで追っかけることになることは篤志にとってみれば火を見るより明らかだった。

(しょうがねえ、なのはを先に帰らせてアレを追うとするか)

そんなことを考えて、篤志はなのはに話をするべく振り向く。

「なのは、お前は先に帰れ」

突き飛ばされたまんまで尻餅をついているなのはに篤志が声をかけたが、なのはの様子が何かおかしい。
篤志の姿を見て固まっているように見える。

「……あっちゃん？」

「どうかしたのか、なのは？」

何だか篤志の顔や体を……特に胸の辺りを見て驚いているようだ。

「髪が……それに……」

「髪？」

なのはに言われて篤志は後ろで束ねている自分の髪を目の前に持ってきた。

そこにはいつもどおりの長い黒髪が……

「ねえっ！……！」

黒かったはずの髪は金色の輝きを放っている。それに気がついて体を見てみると、服も変わっている。

恭也とどうやら同じ色が好きな篤志は、普段着は大抵黒とか紺の暗い色合いの服を好んで着用する。

その着ているはずの服が……あり得ないほどに白く薄い布地だった。そして、その白い布は転生する前に最後に見た物によく似ている。

「……まさか」

篤志は恐る恐る服の中を見てみると……そこにはついさっきまでは無かったはずのささやかな膨らみ。

なのはとは明らかに差のある膨らみがあった。

篤志は実際にその膨らみを触って確かめたから、これは偽物でもパツドでもない。

なのはもお遊びで確かめたことがあるから間違いない。

つまり、本来なら無いはずのものが……

「ある!!!」

(篤志さん、どこ触ってるんですか!!!)

突然の体の変化にパニックになると同時に、昔のことを思い出した。確かライアの体を使って転生するという話を。

「もしかして……」

篤志は恐る恐る股間を触ってみる。

なんとなくついている感覚がないから結論はわかったが、やはりここは触って確認しておきたい。

間違いという可能性もある。

そして、その結論は……

「ねえっ!!!」

最悪の結論をもたらした。

(ねえよ、俺のシンボルが……いや、全世界の男のシンボルが……将来マグナムになるはずのイチモツが……俺の将来のマク スキヤノンがどこにもねえよ!!!)

(篤志さんのエッチ!!!どこ触ってるんですか!!!)

「あっちゃんが……女の子になっちゃった?」

まるで魔法にでもかかったような篤志の身に起きた異常。

魔法少年ならぬ、魔法少女?それとも女神の体だから魔法女神?

とりあえず始ま……

「始まらねえよ!!!」

(私の体のどこが不満だって言うんですか!!!)

「そういう意味じゃねえ!!!!」

「あっちゃん……誰と話してるの?」

篤志とライアとなのはが漫才を繰り広げている頃、黒い化け物は何故か律儀に待っていたことに気付いたのはフェレットだけだった。

第2話「……続いちゃった、しかも短けえorz」

よう、俺の名前は高町篤志。ひよんなことから女神の体を使って別世界の地球に転生しちゃった。

転生に使った体は胸がでかくてメツチャスタイルのいい、もろ俺好み
のライアとかいう堕女神。

女神って言うてたけど、俺を殺した張本人の一人だから堕女神でいいだろ。

堕女神……人を殺して堕ちた女神……ぴったりじゃね？

転生してから8年間、これといって波風のない平凡な暮らしをしていたはずだったんだけどなあ。

何をどう間違ったのか、俺の双子の姉（胸も履いているパンツもお子様だがな）の高町なのはと一緒に俺は日常から非日常へと移っていく……っばい。

おっかしいなあ？俺は本当に平凡に暮らしていただけなんだけどなあ？俺ほど平凡を愛する男はそういない……はず。

そう、例えば……お姉ちゃんと呼べといったアリサの膨らんでない胸を触って溜息ついて、ついでにスカートもめくって犬さんプリント（この世界のテレビでやっている、5匹の動物が主役のほのぼのアニメの犬のプリントのパンツのことだ）のパンツを見てもう一度溜息ついて、もっと胸を大きくして大人っばいパンツが似合うようになっってから出直してきやがれって言うったり、なのはを朝起こすのにマットレスごと一緒に床に落したり、お姉ちゃんと呼べってい

ったときにアリサの時と同じように小さい胸をアリサのときとは違
って服ごしじゃなくて直に触って確かめて、パンツの柄もついでに
確かめて（アリサの履いていたパンツのキツネさんヴァージョンだ
った）溜息ついて以下略したり、大人の女性やメイドさんや巨乳さ
んが好きだったり、今の俺の体でもあるライアにどうやってたら××
×なことができるのか考えたり……うん、メツチャ平凡だ。
あまりに平凡すぎて、もっとはっちゃけると言いたくなるくらい平
凡だ……ホント涙が出てくる。

それなのに……なんで、なんでこんなことになるんだよ!!!
夜飛び出したなのはを追って動物病院に行ったら、目の前にいたの
は学校の制服をアレンジしたなのはと黒い化け物。

でも、このコスプレしたなのは……なかなかかわいいな。

もちろん、俺の守備範囲外だけどな。10年後なら……いや、さす
がにその時にこの格好してたらイタイ人だな。

……誰だ？なのはたんカワイイとか言ってハアハアしているヴァカ
共は。悪いけどな、なのはに手を出そうとか考えるなら、俺が黙っ
ちやいないぞ？

そんな愚か者にはこの女神の体を持った俺の力で修正してやるよ。
いいか？決して女神の体……つまり女の体になっちまったからその
憂さ晴らしてわけじゃねえんだからな？

あくまでなのはに変な目を向ける貴様らに天罰を下すためだからな
？そこんところを間違えんなよ？

俺が女になっちまった憂さ晴らしとかじゃねえかな？……ホント
だかな！……いいか、あくまでなのはのためだかな？なのはを
守るためだかな？

女になっちまったことなんて、これっぽっちも関係ねえんだかな
!!!女の体になったことを気にしてるのはよくて地球の面積くら
いだかな、気にしてんのは。なのはのためは……月の面積くらい
か？うん、なかなか広大な面積だ。

……いかん、なんだか自分でも何を言っているのかわからなくなってきた。

つつか、そもそもこれって続くのかよ？いいのかよ、こんな中途半端で、こんなプロットも何も無さそうな話で……！！

これを読んでいるなのは可愛さをよく知っている（ハアハアしい良識ある素晴らしい人達）もこの無謀な愚か者を止めてくれ。

いや、決して俺が女の体にこれ以上なりたくねえってわけじゃねえかな？

あくまでこんなもんを読んで時間を無駄にしないようにしようという俺の提案ってやつだ。

決して女の体になりたくねえわけじゃねえかな。

いや、別に大事なことから2回言っただけじゃねえんだけどさ、なんつつか……あんまりにも微妙じゃん？この話って。

それならば、後腐れないようにネタで終わらせようぜって感想とかに書いとけばさ、俺もみんなも幸せになると思うんだよ。

いや、別に俺の幸せとかはいいんだ。男のシンボルが無くなったとか、好みのタイプの女の体に自分が憑依してるんでイタズラできないとか、ホントにそれはどうでもいいわけよ。

ライアの胸をちゃんと揉めないとかさ……どうでも……いいわけよ、グスッ。な、泣いてなんかないぞ？ライアの胸に顔を埋められないとかで泣いてるわけじゃねえんだかな。

……ん？いつまでアバンでこんなこと続けているつもりだって？

これってアバンなのかよ？ていうか、ホントに本編に続くのか？俺は女の体から始まんのか？……あ、そこから始まるわけね。

……というわけで、始まなくてもいいけど始まるんだとさ。帰って……不貞寝してえな。

そんじゃ、こつから先は本編だ。

最初に言っておく……見んなよ？いいか、俺が女になったところな

んて見るんじやねえぞ？見るんじやなくて読むんだよとかツッコむんじやねえぞ？

そんじやあ……言うのね？……言わなきゃなんないのね？ああもう……わかったよ、リリカルマジカル、ガンバリ……たくねえ!!!

第2話「………続いちまった、しかも短けえorz」

「な、なんじやこりやあああ!!!」

篤志は股間にあてた手にいつもの感触がないことを確かめると、某刑事ドラマのごとく吠えた。

今は水鉄砲でも、将来にはきつとマグナムになって、別の体に別れたライアをヒイヒイとよがらせるであろうイチモツがなくなったことよって出てきた叫びであり、某刑事ドラマのように手が真赤に染まっていたから出てきた言葉では決して無い。

「あっちゃんが女の子になっちゃったああああ!!!」

なのはも篤志の様子の変化によつやく対応できたのか、今の状況など全く考えもせず驚く。

「やべえ、なのはより胸がある!!!」

(そういいながら胸を揉まないでください!!!)
「ウソだ!!!……あああ、あっちゃんに……負けたあああ？
お姉ちゃん女の子なの？」

篤志の言葉になのはも篤志の胸元を見て、そこにある僅かな膨らみを見る。

そして、自分の胸元と見比べる。

篤志にあるなだらかな丘にくらべて、明らかに平坦な洗濯板。
姉としてのプライドが、女としてのプライドが一気に砕け散った。

(うつうつゝ篤志さん、あの化け物を追いますよ)

色々とまさぐられたライアは落ち込みながらも、とりあえず今の状況を解決しようと篤志を促す。

(もう立ち直ったのか……ホントに犯したるか?)

(ふっふっふ、篤志さんの言いたいことはわかりますよぉ)。でも、
どうやってやるんですかぁ?)

(む、むかつくな、こいつ)

ライアとの脳内会話を終えて、篤志はめんどくさいとは思いつつも化け物の逃げた先に向かって走りだそうとする。

そんなとき、ライアが声をかけてきた。

(ほらほら、いいからさっさと行きますよ。悪しきものを滅ぼす。

これは女神のお仕事なんですからね)

「ちつくしよおおおお!!!それは俺の仕事じゃねえんだよおおお
おお!!!」

ヤケになった篤志は、結局ライアの言うとおりに化け物を追う事に

なってしまった。

別にライアの胸に惚れた弱みがあるからではない……はずである。

(篤志さんツン全開です、いつになったらデレるんですか?)

(なんだよ、その腐女子みたいな言い方!!!つつか、誰が誰にデレるんだよ?)

そう言いながらも篤志は走る速度を緩めない。

「なのははここで待ってるよ!!!」

そして、のたくらと追っかけてくるなのはを注意するのも忘れない。なのはとしても必死になって走っているのだが、何やら不思議な力を使ったことによる篤志の脚力に追いつけるはずがなかった。

「あっちゃん、だからなのはじゃなくてお姉ちゃんだよ!!!」

いつもの文句を言うなのはを置いて、篤志はそのまま化け物が吹き飛ばされた方向へと駆け出した。

(いました、あそこです)

吹き飛んだ方向に走って、しばらくしてようやく篤志は化け物に追いついた。

しかし、住宅街に吹き飛んだ化け物で騒ぎになっているかと思っていたが、付近の住居からは何も反応がない。

それについてライアも気がついたのか、思ったとおりの疑問を口にした。

（何かの結界……でしようか？）

（んなもん、超常現象に疎い俺が知るわけも無い。いや、ダメ神に会うなんて確かに超常現象かもしんねえけどな？）

（だからダメ神じゃなくて女神ですよ）

そんなことを話しながらも、次第に化け物との距離が詰まっていく。そしてついに化け物の直ぐ近くにまでたどり着いた。

「んで、どうやってあれを倒すんだよ」

わざわざ篤志に追いかけさせたということで、篤志はライアには倒す手段があるという事だろうと考えた。

（あ、はい。篤志さん、右手を前に出して、剣を持つようにイメージしてください）

（なんだよ、そのイメージで強くなれますみたいな展開は）

悪態はつくものの、どうせ自分には何をどうすればいいのかわからない以上、ライアの言葉に従うしか無い。

そんなこともあり、篤志はいつもの稽古どおりに自分が剣を持っている姿をイメージする。

「……………こうか？」

それと同時に俺の右手のひらから光が溢れて、不定形な剣が構成された。

もともと刀剣類に詳しいわけではないので、なんとも形だけという

有様だが篤志の背丈にあつた長さの刀身くらいしかない。

「そんで？これからどうするんだ？」

（いつものお稽古のときとおなじです。距離がありますし住居もありますから、そうですね……三の太刀で一氣にいきましょう）

これから戦いが始まるのに、二人はいやに落ち着いている。

それもそのはず、もともとライアは戦いの経験がある。

篤志は……おそらく勢いに乗っているだけだろう。

「三の太刀……ああ、あれね。でも、あれって兄さん達に見せたら隙が多いとかって言われなかったっけ？」

ライアに言われて剣の練習をしていたときに、兄達に言われた言葉。それは何をしたいのかわからない……だった。

その場で剣を振って何になる？としか言われなかったのだ。

事実、篤志もその言葉に何も否定できなかった。

（いいから早く……！）

誰もいないのに誰かと話すように声を出す篤志と、篤志の脳内でしゃべるライア。

他人から見ると白い目で見られるような状況だが、幸いにも結界が張られているせいか、篤志達を見ている者は誰もいない。

「お、おう……！」

ライアに促されて、篤志は右手に持った光の剣を腰だめに構えて、意識を剣を持つ右手に収束させる。

そして、ターゲットである化け物を見据えて剣を一氣に振り抜いた。

「ライア流剣術、三の太刀……星!!!!」

振り抜くと同時に、剣の刀身が光の弾となって化け物に突き進んでいく。

それと同時に刀身は消えて、篤志の右手にはさっきまで持っていた剣の欠片も何も無くなった。

もつとも、それを気にする前に篤志の飛ばした無数の弾が化け物を貫いていたので、そんなことを気にする必要はなかったが。

こうしてライアに言われて、篤志は霧散した化け物のところに今回の元凶になった物の回収に向かうことになった。

「あつちやくん」

その一步を踏み出そうとしたそのときに、高町家のみの虫……もとい、今の篤志の人生にとって占める割合の大きいなのはがやってきた。

今までの篤志がなのはに対する態度がヒドイとか考えている方、それは大きな間違いである。

他の方にどう見えるかはわからないが、篤志はなのはのことを大切に思っている。

もつとも、それはあくまで家族としてのことをいう必要はないだろう。

なのはがヒロインだとは決して思っではいけない。

もちろん、アリサやすずかも体型がお子様だからヒロインだとは決して思っではいけない。

「なのは、来ちまったのか？」

思ったよりも早い登場に篤志は驚く。

なのはってこんなに足が速かったっけ？と、失礼なことも考えている。

「はあ、はあ、はあ……だつてえ、あつちゃんのことを心配だったんだもん」

今のなのはの言葉に篤志は不意を突かれて感動を覚える。

やはり大切な存在が自分のことを心配してくれるというのは素直に嬉しいものだ。

……もつとも、篤志はそれを態度には出さないが。

(なのはちゃん、良い子ですねえ)

なのはにライアの声は聞こえないから、篤志はとりあえずその言葉に軽く頷く。

「えへ……どう？お姉ちゃんらしいでしょ？」

なのははそう言うてにっこり笑うと胸を張った。

(……前言撤回だ。なのははやっぱりみの虫でお子様パンツでペチヤパイだ)

(前言撤回って……何も言ってないじゃないですか)

篤志の言葉に対するライアのツッコミを聞いた者は、当然のごとく誰もいなかった。

「そんなことよりもジュエルシードの封印を」

とりあえずこれからどうしようか考えていたときに、ふとなのはの

肩から誰かの声が聞こえた。
明らかになのは声ではない。

(……ん？今の声って誰だ？……ライアの声でもない。なのは声でもない。もちろん俺の声でもない。……誰？キョロキョロしている俺はなのはの肩にいる一匹のイタチだかオコジヨを発見した。まさかこいつがしゃべっているなんて……ねえ？ねえよ、そんなことは絶対ねえよ。もしそうだったりしたら、俺はなのはのことを「お姉ちゃん」って呼んで……やっぱやめとくわ。いや、もし本当にこのイタチだかオコジヨがしゃべってたらホントに呼ばなきゃならねえじゃねえか)

突然の出来事に、ライアに声をかけられるのには慣れたものの、それ以外の突然のことには免疫がないのか、呆然と何かを考え続ける篤志。

「封印ってどうやって？」

篤志のそんな考えも知らずにフレットだかオコジヨと話を続けるなのは。

そして、その小動物もなのはの質問に対して、封印がどうか魔法がどうか説明をしている。

(……あぶねえ、あぶねえ。もし気の迷いなんかしてたらなのはをお姉ちゃんって言わなきゃならんところだった。間一髪のところまで引き止めた俺のナイス判断……さすがだな)

なのはと小動物の話をする光景を見て、篤志が自分の浅はかさを悔い改めるのを余所になのははジュエルシードをレイジングハートを使って封印した。

そして、誰かに見つかる前に急いで家に帰ることにしたのだった。

(ところで……篤志さん?)

外で待っていた恭也に何とか家を勝手に飛び出したことを適当に言い訳して自分の部屋に戻ったときに、篤志はふとライアに声をかけられた。

ちなみに、篤志の体はまだ元に戻っていない。

もともと子どもであるため、髪の色と瞳の色以外の変化は服の上からは殆どわからない。さきほどの白い服も戦いが終わると同時にもとの服に戻った。

だから、ライアの力で髪と瞳の色だけ黒くして篤志は事なきを得た。なのは今度説明しないといけないが、篤志自身も自分の身に何が起こっているのかわからない。

(なんだ?)

(あの……さっきのライア流剣術って、なんですか?)

篤志は三の太刀を使った時にそんなことを口走ったなあなどと考えながら、ライアの質問に答える。

(いや、俺ってライアに剣術を習ってるじゃん?ならライアは俺の師匠だろ、だからライアが使っていた剣術だからライア流剣術)

我ながら安直だが、それもまたいいだろうなどと篤志は考えていた。それよりも、篤志自身はライアが教えてくれる剣術の流派の名前を

聞いたときに、その名前は絶対に言わないと心に決めていた。

（私の使っている剣術は『龍凰翔霸流』ですよ？最初に剣術のお稽古を始めるときに言いましたよね？）

（いや、さすがにその厨二っぽい流派の名前はどうかと思うぞ？）

（これでも女神に伝わる由緒正しい流派です！！！！）

（いや、だって……ねえ？どう聞いたって厨二全開な名前だよなあ？だから、まあいいじゃん）

（よくありません！！！！いいですか、龍凰翔霸流は私が生まれる25000年以上前に編み出された剣術なんですよ？それをまるで私を作ったみたいなの流派の名前じゃ、開祖に申し訳が立たないじゃないですか）

ライアの生まれる25000年以上前って……もうどうでもよくね？などと思いつつも、頭の中にも響くお小言を聞き流す。

もう8年も一緒にいる関係だ。あしらい方もそれなりに理解している。

もっとも、それはライアにも言えることだろう。

「さて、そろそろ風呂に入って寝るとすっかな？」

（あ、そういえばなのはちゃんを追いかけるのでお風呂に入れませんでしたものね）

熱い湯に浸かって一日の疲れを落とすとしてようと考えて、篤志の動きが一瞬止まる。

（ちょっと待てよ、今の俺って女神の体だよな？ライアの体なんだよな？これから風呂に入るってことはだ、裸にならんといいかんわけだ）

体は8歳だとしても心は大人、惚れている異性の体に興味が無いわけじゃない。

もっとも、その惚れている相手が自分と同じ体に存在しているのだが……。

(……あ！！あ、篤志さん？お風呂は別の日にして、今日はもうお休みにしませんか？)

どうやらライアも篤志の考えに気がついたらしい。

今から風呂に入るということは、篤志は直にライアの裸をこの目に焼き付けることができるということ。

(何をおっしゃるライアさん。お風呂に入らないのは不衛生じゃないですか)

(その丁寧な言葉使いが逆に怖いです！！！)

(ふっふっふ……ついに、ついに俺の時代がきた！！！今までさんざんライアにお預けっばいことをくらわされてきたのも、きつと全ては今日この日のため！！触っても虚しいだけが、見るぶんには問題は何も無い。いざゆかん、湯けむりのパラダイスへ！！！)

篤志のテンションは一気に最大値に突入し、今にもスキップをしそうな足取りで階段を降りていく。

「さつとと、ライアの体をゆっくり鑑賞しなきゃねえ〜(さつとと、疲れをとるために風呂にはゆっくり浸かんなきゃねえ〜)」

(やめてえ〜！！！というか、本音と建前が逆になってますよお〜！！！！)

ライアの悲鳴が篤志の頭に響く。

しかし、そのあらしい方を知っている篤志に効くはずもなく、ラ

イアの言葉が篤志以外の誰かに聞こえることもなかった。

そして、ついに篤志は脱衣所に到着した。

（ここまでの数10秒……本当に長かった。今、この時を、我々は8年待ったのだ!!!）

実際には誰も待っていない。

少なくとも、自分の体を見るのに8年も待つような人間などいない。しかし、篤志にはそんなことはどうでもよかった。

篤志は目を瞑って服を脱ぐ。

なんで目を瞑るか、それは脱ぐ途中でライアの裸が見えてしまったら喜びも半減だからだ。

風呂といったら裸、裸といったら風呂。これは切っても切れない縁がある。

「さっさと」

（シクシクシク）

下を見ないで風呂のドアを開く。そして、桶を使ってかけ湯して、ついに念願のライアの裸体（8歳バージョン）を篤志はその目に焼き付ける。

篤志は確かにお子様体型に興味はない。しかし、この体が将来生まれ変わる前に見たあの体になると考えれば、これは漢の妄想を掻き立てるすばらしいものになること間違いない。

「では、いざパラダイスへと参らん!!!」

そして篤志はパラダイスへ……

(……………おやおやあ?……………おかしいなあ?目の錯覚か?なんでこんなもんあるんだ?)

この象さんはなんだ?この将来マグナムになりそうな水鉄砲はなんだ?まさか……………)

篤志は自分の股間に手を当てる。

そこには今はないはずで、本来の自分には必要なイチモツが……………あった。

篤志はパラダイスに行けなかったのである。

今の篤志がたどり着いたのは……………地獄でしかなかった。

「戻っちまったああああ!!!」

(よかった……………ホントによかった、神様、本当に感謝いたします)

(なんでだ?絶望した!!!神も仏もないことに絶望した!!!俺の純情を返せええええ!!!つうかライア、お前も女神なら神様なんじゃねえのか?)

(ありがとう、神様本当にありがとう!!!)

篤志のツッコミに答える暇もないのか、ライアは自分の身に起きた

奇跡を神に感謝していた。

第2話「……続いちゃった、しかも短けえorz」（後書き）

現在のところ、各話の最初に登場キャラの内の一人がアバンの内容をやっていきます。その際は本編のキャラとは別人にお考えください。

（一部本編に関わるお方もいますが）

第3話「パンツ貯金始めました」

あら、こんな馬鹿な作品を見にきたの？あんたも物好きよね。

あ、自己紹介がまだだったわね。私の名前はアリサ・バニングス。私立せい……学校のこととかは別にどうでもいいわね。

今回は私とあのバカ……高町篤志と私のことについて話をしようと思っわ。

ホントは話なんてしたくなんてないんだけど、このアバンとかいうのでアイツとそれを取り巻く周辺人物の関係を簡単な説明していうって感じになったんだって。だから、ここにいる私は本編の私とはまた少し違った立場にいる私ってわけ。

とりあえず説明に入るわよ？アイツのことを知ったのは入学してすぐの頃よ。

同じ学年に綺麗な顔立ちをしている男の子がいるって噂があったの、何でも男の子なのに物凄い美人だとかって。

まあ、そんなときはそんな奴もいるのねって思ってたくらいで、私は特に気にもしなかったんだけどね。

アイツと直接会ったのは、すずかとのことでなのはと取っ組み合いの喧嘩したときのこと。

すずかにイジワルした私が悪いって言えば悪いんだらうけど、いきなりあいつが私のことを蹴り飛ばしてきたのよ。

あいつは「なのはを泣かせんな、このメスガキ」って言ってきたわ。

そんで見た顔は確かに美人って言葉が確かに似合っていたわ……目つきを除いてね。

目つきは……何と形容していいかわかんない感じだけど、とりあえず悪ガキって感じなのよね。

まあ、最初はなのはのボーイフレンドかなって思ってたんだけど、双子って聞いたときは流石に開いた口が塞がらなかったわ。

だってさ、なのはは桃子さんによく似ているから親子だって言われなくても素直に納得できたのよ。

それなのに、篤志ってば桃子さんにはもちろん似ていない。

士郎さんにも似てないし、美由希さんや恭也さんにも似てない。双子のなのはにも似てないのよ？それなのに双子ってどういうこと？最初は篤志が養子なんかじゃなかったかと思ってたけど、そういうわけじゃないって言ってたし……。

まあ、そんな感じでアイツとは出会ったってわけ。ちなみに、アイツに持った第一印象は最悪だったわね。

あの喧嘩以来仲良くなったのはとすずかだけよ。

ついでになのはの双子の弟の篤志と一緒に行動することも確かに多くなったわ。

そんなとき、お互いの誕生日の話になったの。

それでなのはと篤志は3月生まれて聞いて、私が4月、すずかが11月に生まれたの。

4人の中では一番のお姉さんである私が篤志に向かってお姉ちゃんと呼びなさいって言ったときに事件が起こったってわけよ。

以上、説明終わり！！……え？ダメ？最後まで言えって？い、嫌よ！！！！なんであんな恥ずかしいことを言わなきゃならないのよ！！！！

……わかったわよ、言うわよ、言えばいいんでしょ！！！！

あいつはさ、お姉ちゃんって呼びなさいって言った私に近づいたか

と思うと、両手で私の胸を揉んできたのよ!!!

まあ、その後にイタズラが成功したって顔で騒げば、私だって怒れたかもしれないのに、アイツは更に予想外の行動に出たんだから。

……何とアイツは、私のす、スカートを捲ってば、ぱぱぱ、パンツを見たのよ？信じられる？スカート捲りだけじゃなくて、パンツまでしっかり観察したのよ？こんな信じられる？

しかもアイツは溜息をつきながら、何も悪いことをしてないってような顔で「まだまだお子様だねえ、もっとボインになって大人っぽいパンツが似合うようになってきてから出直してきな」なんて言いやがったのよ!!!今テレビでやっている、5匹の動物が主人公のアニメに出てくる『犬のた〜ちゃん』がプリントされたお気に入りだったのにiiiiiiii!!!

はあ、はあ、はあ……流石に興奮しすぎたわ。とりあえずこんなわけアイツとの関係は最悪と言ってもいいって感じ……ならよかつたんだけどねえ。

普通だったらこんな目にあってまであいつと一緒に行動するようなことはないわよね。

でも、私は……うっん、私とすずかは知っている。アイツが……篤志が実はとてもなのはに対して優しいってことを。

なのはは……多分気付いていない。アイツはいつもなのはをわざと怒らせているように見える。でも、いつも何かあったときに我慢するよようなのはをわざと怒らせて、そのときにプンプン怒っているなのはをバカにした目じゃなくて、優しい目で見ているのを私やすずかは知っている。

なのはが落ち込んでいるときに、あいつはいつつもからかってなのはを怒らせる。

それでなのはが怒ることがほとんどだけど、その分笑うようになるのも事実なのよ。

だから、アイツのことを少なくとも嫌いにはなれない。異性として

は好きになれないけど、友人の一人としては少しは好きになれるって感じかしら？

まあ、流石に胸を触ったのとスカート捲りはいただけないけどね。

アイツを見返すにはどうしたらいいかしら？やっぱりアレかしらね？私のほうがお姉さんだってことをアイツに教えてあげるべきよね？だって、すずかのお姉さんの忍さんやメイドのノエルやファリンに対しては接し方が明らかに違うんだもの。

それなら……やっぱり私がアイツより大人だつてことを証明しなくちゃ……！！

そうして壮大な計画の第一歩のために買ってきたのはた〜ちゃん貯金箱。

これにはアイツにお子様だつてバカにされたときに悔しさをバネにして少しずつお金を入れている。

え？何のために貯金してるのかって？

……わからない？ほんと〜にわからない？

……私にわざわざ言わせるために聞いているわけじゃないわよね？わかったわよ、言うわよ、よつく耳の穴をかつぽじって聞きなさいよ？

買うのは………パンツよ。

………なによ、その間は。聞こえなかったっていうの？え？聞くんじゃなくて読まなきゃなんない？わかったわよ、ちゃんと書くわよ！……！

お金を貯めて大人っぽいパンツを買うのよ……！

だって、パパやママに大人っぽいパンツが欲しいなんて言える訳ないでしょ……！

男の子を見返すためだなんて言ったら、パパが気絶しちゃうわ。

ううう、私をこんなに辱めるなんて……やっぱり私はアイツが大っきらいよ……！

そこ、ツンデレって言うな……！さっさと本編に行っちゃえ……！リリカルマジカルパンツ貯金始めます……！って、なによコレ……！ほら、今までのことはきれいさっぱり忘れて、さっさと本編に行け……！

第3話「パンツ貯金始めました」

「絶望した……生きていくのがイヤになった。だから……死のう」

ロープってどこにあったっけ？とでも言うように、自分の部屋のタ

ンスを漁る。

もちろん、篤志の部屋にロープなどない。

(いきなりなんなんですか!!!)

「ライアの胸が見れない人生に価値なんて……ない!!!」

いきなりの篤志の行動に、何が起きたのかすらわからないライアに、篤志はそれはもうキリツとした表情で今までの人生に価値無しと決め付ける。

せめて、生まれ変わる前に見たライアの胸に顔を埋めて死にたかった……それすらも叶わない絶望。

それが今の篤志の心にひしめいていた。

(そんなどうでもいいことをキリツとした表情で言わないでください!!!)

「どうでもいい……だと?」

ライアの反論にあるはずのないロープを探していた手をピタリと止める。

そしてライアに告げる。

「お前、俺がどれだけお前のオツパイが好きなのか知らねえだろ?」

自分の思いを……魂の叫びを。

(知ってますけど、そんなの知りたくなんかありませんよぉ)

しかし、言い終わってから自分の言った言葉を思い出してまたもや動きが止まる。

その様子は、まるで何か失態を犯した……そんな後悔のような雰囲気醸し出していた。

「ちょっと訂正する。お前、俺がただけお前の胸が好きなのか知らねえだろ?」

(胸とオツパイを変えただけじゃないですかあ?)

篤志の訂正した言葉に、ライアはどこに違いがあるのかと不思議に思う。

言っている言葉に変化はない。

ただ一つ変化があるとすれば、それは「オツパイ」が「胸」になっただけである。

どうやら、ライアはこの違いの本当の意味をわからないらしい。

「いいか?俺は紳士な気持ちで胸が好きなんだよ」

(……真摯の間違いじゃないですか?まあ、篤志さんは紳士はもちろん、真摯ともかけ離れていますけど)

篤志はふつと笑つと、ライアに自分の持つ紳士の心意気を語るべく、人指し指を天井……いや、天に向かって突き上げる。

「いいかライア、本当の紳士つてもものは……オツパイ言わない」

(………は?)

「男は誰もが女性の胸が好き!!なればこそ、その胸に最大限の敬意を評するのが筋つてもんじゃねえのか?」

(いや、あの……よく意味が……)

「ならば、本当の紳士は、オツパイなんて卑猥な言葉じゃなくて、敬意を持って胸と呼ばねばならんのじゃああああ!!」

(あなたはバカですかああああ!!)

「これぞ俺の紳士理論……そこのお前、惚れるなよ?俺の紳士理論

に惚れたら……お前はもう抜け出せねえぜ？」

(惚れもしませんし、認める気もありませんから。それに誰に言っているんです?)

「よし、言いたいことも言い終わっただし今回はこれでお終い!!」

(え?もう本編は終わりなんですか?)

「いいのいいの、言いたいことは言い終わっただし」

やるべき事は終わったとしても言うようにベッドに篤志は寝っ転がる。なんせいつもの夜より色々あった。

女になったり、オコジョが喋ったり、女になったり、なのはが変なコスプレしたり、女になったり、本当に色々あった。

(ちょっと待つてください!!!これって、アリサちゃんのアバンより短いですよ!!!)

「いいじゃん、たまにはアバンが本編扱いでも。アリサもご苦労なことだな、わざわざあんなことやるなんてな。まあ、何を言っていたのかはよくわからんけどな」

(いや、第3話でたまにはってどう考えてもおかしいですから!!!)

もはや本編と関係のないことを話し始める二人。

これも主人公の特権というものなのだろうか?

(え?ちょっと、篤志さん?ほんとに終わりなんですかあ?)

「終わらないよ！！あっちゃん、まだお姉ちゃんはさっきのことのお話を聞いてないんだよ？」

しかし、篤志が寝ようと思ったそのとき、部屋の中に高町家のみの虫が入ってきた。

しかも本当に布団をかぶった姿は、正にみの虫と呼ぶにふさわしい。

「明日も早いから、早く寝ろ」

「あっちゃんが説明したらお姉ちゃんも寝るよ」

説明、恐らくどうして女の子になったのかを聞きたいのだろうが、篤志自身どうしてあんなことになったのかよく理解していない。

そして、ライアのことを説明するにも説明しづらいし信じてもらえない可能性は少ないだろう。

そのため、篤志はとある手段をとるしかなかった。

「俺にもわからん、以上」

その手段とは……なのはの質問を適当に流すこと。

「ダメだつてば、ちゃんとお姉ちゃんに説明しなさい」

そう言いながら、むうっつとふくれっ面でなのはは篤志の布団を引き剥がそうとする。

その光景はまるでみの虫が新しいみのを手に行っているようにも見え

る。

「んなもんより、あのオコジヨに今回のことを説明してもらえよ」
篤志はめんどくさいとでも言うように、なのはに今のところ一番怪しいあのオコジヨから話を聞くべきだと主張して、なんとか自分は平凡な明日を期待しての眠りにつこうとする。

「あ、そっか……そうだよな。じゃあ、あっちゃんも私の部屋に行こう?」

そうやってなのはは、篤志の布団の中から篤志の手を掴んで強引になのはの部屋に連行していった。

篤志はなのはに何かを頼まれると余程のことが無い限り断らない。その余程のことの筆頭とは、もちろん『お姉ちゃんって呼んで』である。

そんなこんなで篤志となのはとオコジヨとの情報交換が始まった。最初にそれぞれの自己紹介となったが、篤志やなのははともかくライアはなのはやオコジヨにその存在を知られていないので説明は無し。
説明したら篤志が転生者であることも話さなくてはならないかもしれないからである。
ちなみにオコジヨは篤志達のことを最初はさん付けしてきた。しかし、流石にオコジヨにさん付けされるのは変な気分だった篤志となのはは、呼び捨てでいいとオコジヨに伝えた。

「なのはと篤志ですか。僕の名前は」

そして篤志となのはの自己紹介が終わり、オコジヨの自己紹介へと話が進む。

「カモ君」

篤志はコイツに似合う名前はそれ以外にねえとでも言うように、オコジヨが名前を言う前に言い切った。

「そうなんだ、カモ君って言うんだ。よろしくね、カモ君」

「いや、僕の名前はユーノ・スクライア」

「いや、どう見てもお前カモ君ってツラだろ？」

(それってどういう顔ですか?)

「あっちゃん、どうしてカモ君なの？」

「いいか、これを書いている愚か者はリリなのを二次創作で知った口なんだ。その際に出てきたオコジヨは愚か者の脳内映像ではカモ君として出てきたんだ。故にカモ君だ。あ、一応愚か者は原作を全話見ているからな？」

(篤志さん、今の説明ってなんですか?……電波ですか?)

篤志による突然の意味不明な言葉。

何気にいつも何を言っているのかわからないかもしれないが……。

「そっか、それじゃあ仕方ないね、よろしくねカモ君」

しかし、なのははその篤志の言語をまるで気にしていないようにカモ君と名付けられたオコジヨに向かって挨拶する。

(聞こえないとは思いますが、カモ君よろしくお願いします)

ライアも聞こえないとはいえ、流石に礼儀に反すると思ったのか、丁寧に挨拶するものの篤志の先程の言葉を気にしているような様子はない。

「え？あの、ちょっと？だから名前が違っって……」

そして、自己紹介も終わったことで、今夜起きたことについての話へと進む。

しかし、篤志はさっさとこの話を終わらせて不貞寝することで頭が一杯だった。

(今日は……ライアの胸に包まれる夢が見れたらいいなあ)

第3話「パンツ貯金始めました」（後書き）

ユーノの名前がカモ君に固定されましたが、これはユーノアンチの布石では決してありません。むしろ、このカモ君の名前が後に重要な部分を占める……かもしれせん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2364q/>

転生紳士の紳士（パンツ）な日々

2011年1月26日07時44分発行